



郷小だより

茅ヶ崎市立浜之郷小学校

2023年7月1日

7月号

校長 安倍 武雄

学校教育目標 ～支えあう・聴きあう・学びあう～

子どもたちが自分を再発見し、友だちを再発見し、学ぶことの価値と意味を再発見して「人生最高の6年間」を生み出す学校、そして、その営みを通して教師も親もともに育ちあう学びの共同体としての学校でありたい。

1日に最低1回は必ず全部の教室を巡ろうと思っています。「なんで、来たの?」「先生見てみて!こんなのできた!!」「質問してもいいですか?」「今度、いっしょに遊ぼう」…。ほんのちょっとした子どもたちとのコミュニケーションがとても楽しいです。教室をまわると、学年が上がるにつれて、タブレットの使用率も上がってきます。使用の目的も方法も複雑になっていきます。まさにICT全盛といってもいいかもしれません。そして、最近のニュースで話題にならない日はないのがチャットGPT等の生成型AIです。なにせ、質問やお願いをするだけで、かなりのレベルの答えが返ってくるというのですから、忙しい大人には必要なものかもしれませんし、上手に使えば子どもたちの「足りないところ」を補ってくれるようになるかもしれません。文部科学省も、神奈川県教育委員会も夏休みに入る前までにガイドラインを出していきたいと考えているようですから、当然学校はその指示に従っていくことになりませんが、それ以前に大切なのは、私たちが「ICTの技術は「道具」なのだ」と強く自覚することだと考えています。



2年生はこの日給食に出される枝豆のさやもぎの日です。実際にやってみる前に栄養士から話を聞きます。枝豆の特徴やさやもぎの方法を、タブレットを使って説明しています。言葉だけの説明に比べ格段に説得力が増すのは映像のおかげですし、それを簡単に準備できるのもICTの利点です。

その説明ののち、今度は各教室で2年生たちが「固いんだね」「毛が生えてるよ」「ざらざらしてる!」「早く食べたいなあ…」などとお話ししながらさやもぎの実体験です。



給食の時間、いよいよ給食場で実際に調理されて教室に届きます。2年生にお話を聞くと、「おいしい!」「お代わりしたよ!」「うーん、そら豆のほうが好きかな?」といいながら、おいしそうにほおばっていました。

これから時代、このリアルとバーチャルを意識的に行き来できることが大切なのだと思います。映像だけでは、まだまだ「毛が生えてるよ」「ざらざらしてる!」「おいしい!」「青臭い」など、ミクロな視覚、触覚、味覚、嗅覚などは伝えられませんし、実体験として「枝豆に直接触れる」ことがなければ、映像から想像するものも薄っぺらいものになってしまうでしょう。

同様に、鍵本先生のお話会や有志のボランティアの方で構成されているお話の部屋での体験も同じことが言えるでしょう。読書を通しての疑似体験や、感情を共有することなど子どもたちの経験を深めることにつながっているはずです。



同様に、鍵本先生のお話会や有志のボランティアの方で構成されているお話の部屋での体験も同じことが言えるでしょう。読書を通しての疑似体験や、感情を共有することなど子どもたちの経験を深めることにつながっているはずです。



たくさんの実体験をもとに、道具としてのICTを使いこなすカッコいい大人になってもらいたいですね。